

死に戻り令嬢は  
憧れの悪女を  
目指す

暗殺者と  
はじめる  
復讐計画

1



## アッシュ・ユーリフェリス・ クレスト

王国に蹂躙されたヴィルカス連邦  
出身の暗殺者。  
アーネスト公爵家に復讐し、  
奪われた宝『女神の右目』を取り戻す  
目的のためにキサラと手を組む。

## キサラ・アーネスト

悪名高いアーネスト公爵の娘。  
数百回殺され続ける死に戻りの結果、  
開き直って超ポジティブ思考に。  
『悪女』らしく生き抜くため、  
暗殺者アッシュと手を組むことに。

ファビアン・フルニエール

フルニエール広報社を  
経営する。  
やり手の新興貴族。

ヴィクトー

市民活動家。  
思想は過激だが  
物腰は柔らか。

アンリ・マルス・  
イムリシア

王太子殿下。  
顔に似合わぬサディスト。  
婚約者を虐待するのが  
趣味。

クラーク・  
ロンベル

ロンベル公爵令嬢で、  
王太子殿下の婚約者。  
秘めた恋をしている。





CONTENTS

プロlogue

羽化する悪女と暗殺者

006

第一章

二人の逃亡

024

第二章

悪女の暴露

070

第三章

葬られた公爵令嬢の反撃

109

第四章

流転の日々

158

幕間

暗殺者の独白

175

第五章

真実と離別

193

第六章

ハッピーエンドにはまだ足りない

245

エピローグ

「悪女と暗殺者」の、その先へ

301

# 死に候り令嬢は 憧れの悪女を目指す

暗殺者とは  
はじめる  
復讐計画

1



『私は幸せを味わい尽くしたわ！ 贅沢も恋も、女の楽しみも——何度も何度も、飽きるほどの人生を繰り返しながら！』

唇から血を流し、スポットライトを仰いで高笑いをする、真っ赤なドレスの悪女。

彼女の演技を、私——キサラ・アーネストは今夜も観客席から楽しんでいた。

舞台は大人気の恋愛喜劇。スポットライトを浴びるのは悪女役の女優。

劇中で悪女は何度も死に<sup>ル</sup>戻りを繰り返して、悪行三昧を楽しみ続けた。

しかしヒロインの奮闘によって遂に能力を失い、暗殺者に殺されることになる。まさに今、舞台では悪女が刺殺されるラストシーンが演じられていた。

暗殺者は暗殺目的のため悪女に近づき、恋仲になっていた。

悪女は自分を騙<sup>だま</sup>していた暗殺者に怒りもせず、微笑<sup>ほほえ</sup>んで彼に口付けて笑う。

『愛したあなたと死に<sup>ル</sup>戻りを終えるのなら、それもいいわ。私は十分楽しんだもの、人生を』

愛する悪女の言葉に、暗殺者は震えるナイフを取り落としそうになり——しかし決意を込めて、彼女の背に更<sup>さら</sup>に深く刃を入れる。

舞台の中心、二人は強く抱きしめ合う——そして二人を残し、舞台は暗転する。

明るくなった舞台には女も暗殺者もない。

舞台上にはただ、真つ赤な薔薇ばらが降り注ぎ、悪女の死を表していた。

数えきれないほど眺めた舞台でも、私は毎回初めて見るように惹きつけられてしまう。

——綺麗きれいね、舞台上ぶたいじょうの死は。

本当は死んだって、こんな匂いなんてしないことを私は知っている。死ぬのは苦しい、死ぬのは痛い。匂いも最悪だ。どんだん体が使い物にならなくなっていく絶望感ぜつぼうかんは、本来なら二度と味わいたくない。飽きるほど味わっているけれど。

私はこの後の流れも知っている。舞台に立つ位置、ドレスの皺しわの一つ、全ての来場者の顔から行動まで、百回をゆうに超えた死しに戻もどりですっかり覚えてしまっていた。

私——キサラ・アーネストは。

死んで死んで死に続けて、数えきれないほどの夜を繰り返している。

一年前——父が起こしたヴェルカス連邦への侵攻を記念するパーティ。その夜を起点として、私は数え切れないほど死んでいる。

死んではまた一年戻ってパーティ。死んではまた一年戻ってパーティ。何度でもこの繰り返しだ。死に方は色々だ。市民革命で死んだり、父や兄、はたまた使用人に殺されたり。街に飛び出して、強盗に刺されて死んだり。とにかく笑っちゃうほど死んだ。

まだ数えられるくらいの時は繰り返し返しの恐怖おそに錯乱さくらんして、叫んで暴れた。逃げたりもしたし、生きることいきることに絶望したりした。

けれど泣いても絶望しても、結局運命は変えられないんだと悟るだけだった。

そしてついに私は——百回を超えた死ルにル戻りの時、うっかり父を花瓶で殴り殺してしまった。正当防衛よ、一応ね。

けれど私を何度も殺し続けた父が、ちよつとの抵抗で呆気なく動かなくなった時、気づいた。何度も起点に死にル戻れるのなら、いつそ何度も試行して生きる道を探せばいいのでは、と。

私は気づいてから、己おのれの死を代償にチャレンジをし続けるようになった。その苦勞のかいあって、今では殴られたときに痛みを逃す方法も覚えたとし、逃げるために必要な知識——貴族社会の間関係も、この国の仕組みも覚えてしまった。

けれど結局、私はまだ数百回死ルにル戻りを繰り返しても、生き延びられていない。一年だけの死ルにル戻りでは焼け石に水なのだ。

私の体は十七年間の虐待でボロボロ、立場もか弱い妾しやうかく腹の公爵息女でしかない。味方は誰もいない。詰んだ状態での再スタートなんて、何度やり直しても難しい。それでも。

——客席で人々が起立する。私も急いで立ち上がる。

舞台ではカーテンコールが行われていた。悪女役の女優は晴れ晴れとした笑顔で、ヒロインとヒーローと暗殺者と、手と手を取って辞儀をする。

彼らは海を越えた隣国、エイゼリアからやってきた劇団だった。

鳴り止まぬ拍手の中、彼らは王国の要人から次々と花束を手渡される。ヒロインと恋に落ちた侯爵役の彼に近づくのは、金髪の美しい天使のような令嬢。クララー・ロンベル公爵令嬢だ。

私の父、アーネスト公爵を蹴落として宰相の座に収まったロンベル公爵の一人娘、この国で最も尊い令嬢の一人。可憐かれんに微笑む彼女は、まるで現実世界に愛されて生まれたヒロインのようだ。

しかし私はループの中で知ってしまった。

彼女が花束を渡すヒーロー役の俳優オリバーと、隠れた恋仲であることを。

この日を最後に、二人は永遠に会えなくなることを。

彼女はこれから私に代わって王太子の婚約者となる。王太子は嗜虐趣味サドイストの最低な男なので、彼女のこれからの考えると、胸が苦しくなる。クララーは人々の前で気丈きじょうに微笑んで、苦しい恋の終わりをおくびにも出さない。私は悲しくなりつつ、隣で拍手する父親をチラリと見た。

父エノック・アーネストは、クララーを怒りを込めた眼差しで見つめている。クララーが立っている場所に、本来私が立っているべきだったのだから。

まず今からやることは、父の八つ当たりの暴力を回避すること。

今夜生き延びられたらひとまず成功。その後の作戦はいくつかあるけれど、今やるべきことに集中する。今夜を乗り越えられたことは——悲しいかな、あまりないのだ。

今度こそ生きたい。死んで満足なんて言えるほど、人生楽しんでないんだもの。

そのために今夜はまず生き抜こう。そして、生き残る術すべを探そう。



生き延びたいと願った数時間後。

私は夜会のドレスを着たまま、兄に殴られ壁に叩きつけられていた。

「……ッ……う……」

なるほど、今回はそういうことね——と、他人事のように考える。

他人事ぶつても、痛いものは痛いけど。

苦しみに悶もだえていると兄は酔った顔で私を見下ろし、大声でがなりたてた。

「その目が嫌いなんだよ！ キサラ！ 妾腹に生まれたお前の価値など、王太子あのぼっちゃんのおもちゃになることしかなかったんだ！ くそ！ お前がもつと王太子に媚こひを売るのが上手うまかったら！」

私は身を丸くして防衛ぼうぎょしながら、兄の状況を分析する。

おそらく兄は、今夜の社交の場で、没落寸前のアーネスト公爵令息として冷笑を浴びたのだろう。

私は兄の友人たちを思い出し、心の中で毒づく。八つ当たりで蹴られる側の身にもなつてほしい。迷惑だ。

体の角度を変えた時。不意に、胸に今までとは違うちくんと刺すような痛みが走った。

「あ……」

ちょうど胸のあたりに、血と宝石のかけらが散っていた。

蹴られたとき当たり方が悪くて、壊れたのだろう。

それは父から珍しく与えられたプレゼントだ。一年前——ちょうど死ルにリ戻りの起点の夜。侵攻記念パーティの席で戦利品として見せびらかすように与えられた、ヴィルカス人から略奪した宝石で作られたアクセサリーだ。オニキスだと話には聞いている。

兄はあはあと息を切らせ小休止した。私は防御の姿勢をとりつつ、逃げる道を考える。兄にこれ以上蹴られるわけにはいかない。骨折してしまえば、明日以降の行動が大きく制限されてしまう。どうやって兄を大人しくさせようか——そうだ。

私はペンダントの破片を、兄の靴と靴下の間に入るように飛ばした。最初は気づいていなかった兄だが、急に痛そうに足を高く持ち上げた。

「くそ……っ割れたガラスが……」

妹をぼこぼこにしておきながら、自分はずっと痛いだけで大袈裟おおげさなのだから、笑わせる。すると不意に兄は私を見て、真顔で胸ぐらを掴み上げた。

「……ッ」

「お前、笑っただろ……妾腹ふんごいのくせに、役立たずぶんたすの分際ぶんざいで！」

笑ってないのに、笑う余裕なんてないのに。

兄は容赦なく、胸ぐらを掴んで私の顔を平手で叩いた。私は勢いよく頭から床に転がる。頭が揺さぶられ、意識が真っ白になる。

——あ。これはちよっといけないわ。

痛みを通り越し、ふわふわとしてきたのを感じる。このままでは死んでしまう。嫌だ。死にたくない。

また、最初からやり直しなんて、もうたくさんよ——

『……不幸な娘、キサラ・アーネストよ』

胸が熱くなり、急に体が楽になった。

気がつけば真っ白な世界に座り込んでいた。

女の人の声が聞こえてくる。

『繰り返しの運命に飲み込まれた娘よ。いずれ助けてやりたいと思っていたが無力ですまない

……』

「私が繰り返し返してるのを知ってるの？ どうして？ あなたは誰？」

『生きたいか？』

私の問いかけには答えず、彼女は私に問うた。

「生きたいか、ですって……？」

その瞬間、腹の奥から熱い感情が迫り上がってくる。私は拳を握って訴えた。

「生きたいわよ……当然生きたいに決まっているわ！」

突然尋ねられた混乱と、必死な感情が相まって、私は柄になく声を張り上げ訴えた。



「意地でも生き延びて幸せになりたいの。痛い思いをするだけの人生なんて、もうたくさんよ！」  
必死に訴える私に、彼女は静かに尋ねる。

『苦しい人生を何度も送っても、お前の心は折れぬというか』

「何度だって送ったからこそ、よ。私も舞台の悪女のように死に戻りをしていられるけれど、私は彼女みたいに、楽しい思いなんてちっともしていないわ。ずっと苦しいだけ、痛い思いをするだけ」

私と同じように、悪女も死に戻りに吞まれていた。

けれど彼女は死に戻りの中で、たくさんの生きる幸せを享受した。

贅沢を楽しんで、笑って、恋をして、生きる楽しさを満喫して死を迎えた——しかも、愛する人の腕の中で。

彼女は哀れむような、申し訳なさをにじませた声で続けた。

『私の力のせいで、すまなかつた……だが、お前の運命が来る。お前が死に続けて運命を変え引き寄せた、最後の希望だ』

「え……」

彼女の言葉の意味がわからない。彼女は何か焦れるように、早口で付け加えた。

『外に出て生きろ。数百回の人生で得たものもあるだろう』

「外、って……出たことはあるけれど……」

外に出たことだってもちろんある。けれどうまく行ったことがなかった。

その時、白い世界の外側ががやがやとうるさくなる。

もうすぐ彼女との別れが来ると、直感的に感じる。私は訴えた。

「お願い。もう少しヒントが欲しいわ。闇雲やみくもに外に出ても生きられないことばかりだったから」

『……もうすぐ、愛いとし子が来る——銀狼シルバーカスに愛された……』

彼女の声こゑが掠なぐれていく。閃光が輝かがやき、私は思わず目を閉じる。

最後に彼女は微かすかにこう言った。

『生きなさい。そなたも私の愛し子。奇跡はこれが最後だ。だから悔いの残らないように……』

——次の瞬間。

私は床に伏していた。痛みと苦しさが戻ってきて、私は思わず顔をしかめて胸を見た。

先ほど壊れたペンダントトップの破片が、ドレスの胸元に入り込んで肌を切り裂いている。その痛みで覚醒したようだった。

目の前には兄が転がっている。

情けなくよだれを口から垂らして、半殺しにされて縄で縛られていて、頭を踏みつけられている。

「やめてくれ、やめてくれ、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い」

兄がガタガタと震えながら訴えている。

見上げると、返り血を浴びた鋭い目の男の人が立っていた。

背の高い、私より少し年上くらいの人だ。

逆光の月に照らされた髪は銀色。緩ゆるく編あまれたおさげ髪は獣の尾のように長く揺れている。全て

を覆い隠すような真つ黒なロングコートを纏まとっていて、それも様さまになつてゐる。

月明かりを反射した睫毛まつげまで銀色で、透き通る肌の色は色彩を失つたように白い。

雪に埋もれて死ぬ時は、こんな幻覚が見えるのかもしれない。

そんな錯覚を覚えるような、美しい人だった。

「銀狼……」

私の眩くらきに、彼は視線をこちらへと向ける。私を上から下まで眺めたのち、興味を失つたように視線を再び兄へと戻す。そして、兄をぐりつと踏ふみ躪じつた。

「ぎゃああ」

兄を踏みつけたまま、彼は冷たく尋ねる。

「俺たちから奪つた『女神の右目』はどこにある。金色で猫目に輝く眼球ほどの大きさの宝石だ」

「なんだそれは」

「貴様らが略奪した魔石だ。知らないとは言わせない」

「知らん！　そもそもそんなもの、知つていてもお前に教える義理は……ギヤツ」

銀髪の彼は無表情で足に力を込める。

兄がぎゃああ、と汚い悲鳴をあげた——多分、どこかの骨をやられているのだろう。

銀髪といえはヴィルカス連邦の人。父の起こした侵攻のせいで、酷ひどい目にあつた国の人だ。父が篡奪さんだつした何かを、彼は取り返しにきたらしい。

——遠くから足音が聞こえてきて、ハツとする。

床につけた右耳から、複数の足音が追っているのが聞こえてきた。

気絶した兄や暗殺者の彼には聞こえていないようだけれど。

私は先ほど聞いた、女性の言葉を思い出す。

『……もうすぐ、愛し子が来る——銀狼ヴィルカスに愛された……』

私は銀髪ヴィルカスの彼を見やった。気絶した兄を部屋の隅に蹴りやって、彼は乱暴に部屋を漁あさっていた。彼女の言う銀狼ヴィルカスは間違いなく彼だろう。

さて、生き延びるために……やるしかないわね。

私は深呼吸をして、彼を見た。そして力の入らない体で無理やり声を絞り出す。

「兄は何も持っていないと思うわ。兄は父に何も譲られていないボンクラだし」

声は届いたようで、彼は私を一瞥いちぺつする。私は微笑んでみせた。

「ねえ、そろそろ衛兵が来るわよ。あなたが捕まってしまうえば、ヴィルカス侵攻——あなたの故郷への攻撃を再開するでしょうね？ 元宰相家わたしのうちを襲撃した証拠になるのだから」

ぴく、と彼が反応する。私は話を続けた。

「……あなたの探し物は目を改めた方がいいわ……ということ、ついでに私を……ここから連れ出してくれないかしら？ 一緒に逃げましょうよ」

彼は感情の読めない顔で、じっと私を見つめている。無言だ。

でも諦めるわけにはいかない。私は必死で言葉を紡紡むぐ。

「あなたが殺さなくても、私はいずれ殺されてしまうの。だから連れ出して？ ……親に兄に王太

子に……いろんな人に虐待をされてきたの。見えないところは酷いのよ？ ほら」

私はドレスの胸元を緩めてみせる。

肋あはらの浮いたあざだらけの体を曝さらけ出すと、彼は目を見開く。

「ッ……」

女の胸を見たからというより、ひどいものを見て引いたという顔だった。特にさらけ出した胸元は先ほど壊れたペンダントトップで深く切れている。さぞ痛々しく見えただろう。

彼の表情に私はうまくいく手応えを感じた——彼は、私の体に動揺する程度には情がある、と。

「ねえ、暗殺者さん。私ならきつと力になれるわ。だって私は……キサラ・アーネストだから」

キサラ・アーネスト。濡ぬれ衣ぎぬの悪評で塗り固められた『悪女』。それが私だ。

彼は、私をじつと見て——低い声で問いかけた。

「……連れ出して俺に何の利がある」

返事を引き出せたならこつちのものだ。私は食らいつくように言葉を重ねた。

「私はあなたよりも、貴族界かきわい限かぎの事情を知っている。潜伏するなら女を連れていた方が便利よ。夫婦だとか、恋人だとか……市井しせいにまぎれるには男女二人が一番よ。どうかしら？」

そこまで言ったところで、血が逆流して私はむせた。咳き込むだけで痛くて、涙が出そうだ。それでも私は顔をあげ、唇を拭ぬぐって微笑んで見せる。

彼は動揺している様子だった。

——これは賭けだ。

彼にとつて、市井に紛れるための女なんて不要かもしれない。

でも、こういう時におどおどしたって逆効果だ。

なんとしても、連れ出したいと思つて貰うために、私の価値を見出してもらうんだ。

彼は私の言葉に黙つたままで、時間だけが無情にも静かに流れていった。

血が、ドレスを濡らしていくのを感じる。痛みと苦しみで体力を奪われ、意識が朦朧もうろうとしてきた。

「まあいいわ、勝手にして。……このままなら、あなたも捕まって、私も死んでおしまいよ」

私はそう言い残すと、身を横たえて胸の上で手を重ね目を閉じる。できることはやった。

最期に暗殺者の彼を思う。私の体を見て、彼は動揺してくれた。

動揺してくれる人は初めてだった。話をまともに聞いてくれた人も、初めてだった。

——ありがとう、この死しに戻りプではさよならね、優しい暗殺者さん。

そう思つてはつと我にかえる。

あの女の人の言葉を信じるなら、私の人生はこれで終わりなのだ。

どうしよう、死にたくないと思う。けれど——その感情すら、死にかけて私の心では薄れてきて

……。

その時。何者かに覆おほい被かぶさられる気配を感じた。

「え……」

目を開けば、銀髪の彼が私に馬乗りになっていた。振り上げたナイフが輝く。

——終わりみたいね。

覚悟を決めた瞬間。

ざくり、という音が私の耳の近くで聞こえた。

ナイフが貫いたのは私の長いおさげ髪だった。まとめ髪だったのが、殴られ続けたせいで崩れていたものだ。彼はナイフを引き抜くと、一緒に私の黒髪を掬い上げる。

「連れ出してやる。代わりに、前払いとしてこれはいたただく」

彼が私の上から退く。軽くなった頭で呆然としてしていると、手を掴まれて身を起こさせられた。

「立てるか？」

「な、なんとか」

上着に髪を仕舞い込みながら彼は言う。

「この黒髪ならいくらでも売れる。あんたの逃亡に手を貸す資金にさせてもらう」

「……それは……伸ばしていて良かったわ」

髪を売るなんて新しい知見だ。数百回死んでも知らないことはまだまだあるらしい。

彼の言葉にしみじみしていると、彼は怪訝そうにしかめ面になる。

「あんた女だろ。髪を切られたつてのに、随分落ち着いているな？」

「ええ、まあ……髪はただ、引っ張られるだけのものだったし……」

言いながら軽くなった頭を撫でつつ、私は彼の長い三つ編みに目を向ける。

「聞いてくるつてことは、あなたは髪を大事にしているの？」

彼は答えなかった。私に背を向け、無言で手際よくカーテンを引き裂いていく。ロープを作って



いるらしい。私に背を向けたまま、彼は短く言った。

「動けるならまともな服に着替えろ」

本当に連れ出してくれるらしい。

「ありがとう」

彼は返事をしなかった。私は身を起こしてドレスに手をかける。手が震えてうまく脱げない。自分が思っている以上に冷静ではないらしい。

戻ってきた彼は舌打ちすると自分のコート脱ぎ、私に着せてくれた。中に着込んでいたのは見慣れない装束だった。ヴィルカスの服なのだろう。彼は乱暴に前のボタンを閉じながら言う。

「準備の間に走れるようになつとけ。へたりこんでも置いていくからな」

彼は、窓辺にきつくロープを巻きつけて何度か引つ張る。月明かりが眩まぼゆく差し込んだ窓辺で、さえざえと照らし出された彼はいよいよ綺麗だ。

準備を整え、手を差し伸べてきた彼に向かい、私も立ち上がって手を伸ばす。

手を繋ぐと、彼は窓枠に足をかけた。

「待って。あなたの名前を教えて。私の名はキサラよ」

「……アッシュ」

たっぷり考えたのちに彼は答えた。

「アッシュ  
灰？ 珍しいお名前ね」

「あんたもだろ。キサラなんて、王・国・の・貴・族・ら・し・く・も・ね・え」

「それは……」

「無駄話は終わりだ。行くぞ」

彼は私を背負って余ったロープで固定すると、窓から飛び出して躊躇ためらいなく窓枠を伝って降りた。少し低い位置の屋根に飛び移り、そのまま迷いなく駆け出した。

手を握られ、月明かりの中、屋敷から文字通り逃げていく。

振り返ると高く聳そびえた屋敷がおもちゃみたいだ。

「……生きてるのね、私」

彼に必死について走るだけで、息が上がる。身体中が痛い。それでも気分が高揚して、私は声に出して笑ってしまった。頬に触れる短くなった髪が、頬の横で踊るように揺れる。

ただただ……楽しい。

「あなたは一体何なんだ」

路地を抜けながら、アツシユが呆あきれたように言う。私は手を強くにぎって答えた。

「キサラ・アーネスト。みんなから嫌われた悪女よ」

こんなに清々すがすがしい気持ちになったのは、初めてだ。

白を基調とした石造りのアパートメントが並び立つ大通りが、眩い朝日に照らされている。駆け抜ける石畳は固く、立ち上る冷気は冷たい。鳩があちこちで鳴いていてうるさいくらいだ。

朝の王都がこんな空気だなんて知らなかった。

一階はショーウィンドウが施された店が立ち並び、どこも雨戸が閉ざされ眠っているよう。対照的に労働者らしき人々は脇目も振らずに朝の準備に急いでいる。彼らが持つ荷物はなんだろう。彼らは何をしているのだろう。何屋さんのだろう。

質問をしたいけれど、早足のアッシュについていくのに必死で話せない。

服は夜にアッシュがどこからか持ってきてくれた、着古した男物のシャツと生地分厚いトラウザーズ。靴もアッシュの借り物で、重たくてペタペタする。私の前を歩くアッシュは黒いコートを纏っていた。違っているのは帽子を目深まぶかにかぶっていることと、色の入ったメガネをかけていること。そして何より、朝日の元で見る髪の毛の色が夜と違った。金髪だ。

人混みの前で立ち止まった彼の隣で、私は息を整えて話しかける。

「ねえ、あなた。銀髪だと思っていたわ。見間違えたのかしら」

アッシュは私をぎろりと睨にらみおろす。

「飯を買って街を出る。急ぐぞ」

路地の角に男の人ばかりの人だかりができています。どうやら食堂らしい。アッシュは私を振り返り、少し離れたところの街灯を指し示す。

「あそこで待ってろ。いいか。消えても見つけてやらねえからな」

アッシュは私に言うのと、颯爽と人混みに潜り込んでいき、体の大きな男たちに埋もれてしまふ。しばらくすると茶色の紙袋を抱えてきた。

「それは何？ どこに行くの？」

質問には答えず、アッシュはまっすぐどこかに向かう。ぺたぺたと歩みにくそうにする私に、アッシュは歩幅を合わせてはくれない。上等だわ。私は一生懸命、置いて行かれないように走る。駅に近づいている気がして私は声を弾ませた。

「もしかして汽車に乗るの？ 私、乗ったことがなくて。楽しみだわ」

しかし彼は煉瓦造りの真新しい駅舎を無視する。辺りを見まわし、駅前広場から出立する薄汚れた乗合馬車を見つけると、私の手を掴んで走ろうとした。

「っ……」

走ろうとした瞬間、痛みに引き攣った声ができる。体が軋んで走れない。アッシュは舌打ちをする。袋の端を啜え、私を小脇に抱えてかけた。軽やかに馬車に乗り込む。

突然のことに私がびっくりしている間に、アッシュは愛想良くお金を払って、私を幌馬車の真ん中、一番目立たなそうな場所に押し込んでくれた。中にはひしめき合うように老若男女、様々な労働者の人々が座っていた。視線が私たちに集まったものの、すぐに逸らされる。

馬車が動き出すと、アツシユが私の隣に座って深く息を吐いた。

「あの、アツシユ。これって」

「あんだ。少しは黙っていらねえのか」

アツシユはしかめ面で袋からパンを出すと、私の口に押し付けた。

大きくて丸くて硬い、香ばしいパンだ。

どうやらあれこれと話さない方が良さそうだ。

私は焼きたてのパンを齧ろうとして、一旦止めてアツシユを見上げる。

「あの、……こ、このまま食べていいの？」

「はあ？」

「……かぶりついたこと、なくて」

「いいから食え。要らねえなら俺が」

「いただく、いただくわ」

私は急いで齧り付いた。パンを丸ごと齧るなんて初めてだ。硬い端っこから齧ってよく噛んで飲み込む。急にお腹が減っていることを思い出して、私は夢中になって食べた。中にシチューが入っていて、お腹の中があたたくくなる。野菜もとろとろで、急に体が生きていることを思い出し始めたようだった。緊張がほんの少しほぐれて嬉しくて泣きそうになる。

嬉し泣きしてる場合じゃないけど、食事が美味しいって、嬉しい。

「……」

アッシュが怪訝な目でこちらを見ている。

私ははっとして、目元をぐいぐいと手で拭って笑顔を作る。

「お、美味しいと思っただけよ。泣いてなんかないわ」

「……ゆっくり食べ。あんたが虐待されてたつてのが本当なら、急に食うと腹を痛める。足手纏いを連れていくつもりはねえからな」

「も、もちろんよ」

アッシュはそれだけ言うと、パンをががつとあつという間に平らげて、指をぺろりと舐めた。アッシュのような男の人にはパン一つでは足りないだろう。私はこの時初めて、アッシュが自分を分けてくれたことに気づいた。ずっと怖い顔をしているので怒っているのかと思っていたけれど、この人は私が思っているよりずっと優しい人なのかもしれない——と思いかけてすぐに、私は冷静になりなさい、と自分に言い聞かせる。利用するためならなんだって、人はいくらでも優しくしてくれる。そのせいで何回死んだか。

——あの女の人は頼りなさいと言ったけれど、慎重にしないと。

私はその後は黙って迷惑をかけないようにした。

馬車は、丘を下って水の匂いが漂う河辺の街へと向かっていった。



昼を過ぎ、腰が痛くてどう座ればいいのか悩み始めた頃。アツシユは馬車を降りた。「ここはどこ？」と聞きたい気持ちは抑えて、私は黙ってついていく。

埃ほこりっぽい、どこか気けだるい雰囲気けいの街だった。街は煉瓦造りの小さな小屋のような家がひしめき合って、石畳の舗装もされていない。荷物が多い人、特に男性の姿が多くて、行商人や旅の人が多い街なのかしら——なんて、考えながら私は黙ってついていく。

足の長さが違うせいで、時々アツシユが私を置いて行つては、振り返って待っていてくれる。慌あわてて小走りになろうとすると、「走らなくていい」と言われた。彼なりの気遣いなのだろう。

宿屋の看板がぶら下げられた小さな二階建ての前に立つと、アツシユは私を振り返った。

「いいか、俺に話を合わせろ。何があっても絶対余計なことを言うな」

「わかったわ。黙ってる」

素直に頷うなずいた私に、アツシユは溜息をつき、何かを吹っ切るように「……よし」と言って、店のドアを開いた。

一階は食堂になっていた。掃除中のお婆さんが気だるそうにこちらをジロリとみた。

——今入って良かったのかしら。

そんな風に気にした瞬間、アツシユが私の腰を抱き寄せた。今までと違う気だるげな声こゑ音で、アツシユはお婆さんに尋ねる。

「なあばあさん、空そらいてるか？」

「昼間から呑のん気きなもんだね」

「昼の方が安いからな。後でキツイ酒と飯も頼むわ」

—— 昼間から呑気？ お酒？

私は意味がよくわからない。

「ほら、行くぞ」

アツシユがお金をお婆さんに握らせ、私の腰を挿んだままこちらを見る。その眼差しが今まで見たアツシユとは全然違う。水色の瞳が、私を見て細くなる。

「買った分だけ楽しませてくれよ」

「え、……ええ」

アツシユは私の腰を撫でて、額ひたいに唇を寄せてちゅつと音を鳴らす。私が驚きのあまり硬直するのをしつかりと支え、アツシユはそのまま階段を上がり、上の部屋へと連れて行く。

アツシユはドアを足で開き、私をベッドに降ろす。そしてさっさと私を置いていき、奥の部屋を確認しに行った。

私は天井を見上げながら、困惑のまま呆然としていた。

「……さっきのは……何？」

湯の音が聞こえる。なぜいきなりここで、お風呂？

私は頭がぐちゃぐちゃになる。

「わからない……」

何が起きるといふのだろうか。わからない。少なくとも殺されることはないだろうけれど。

「……拷問？ 尋問!？」

思いつくのが不穏なことしかない。私は頭を抱えてぐるぐると考える。

「……ううん、こんな壁が薄いホテルで尋問なんてしたら、バレてしまうわ。じゃあ一体……？」  
アツシユが部屋へと戻ってきた。

「良かったな、ボロい宿だが風呂はマシだぞ」

髪を銀髪に戻し、眼鏡も外したアツシユがこちらを見下ろし、不機嫌そうに片眉を上げた。

「……何変な顔してんだよ」

「……へ、へんな顔なんてしていないわ」

私は取り繕った。何もわかっていないとバレてしまえば、足元を拘われるかもしれない。訝しげな顔をするアツシユに、私はふふん、と肩をすくめて笑って見せる。

「ふふ。なんでもないわ。あなたつては大胆ね、と思っただけよ」

暗殺者がキサラ・アーネストを連れてこんな宿に泊まるなんて大胆ね、という意味だった。しかしアツシユは気分を害したのかしめ面になると、つかつかと私に近づいて私の肩を軽く突き飛ばす。

「ッ……!？」

ベッドで覆い被さられて、私は驚いて息を呑む。

息がかかる距離で、アツシユが私の顎を掴んで顔を覗き込んだ。

眇めた水色の瞳に、驚いた顔の私が映っている。

「なあにが悪女だ、何の意味もわかってねえくせに」

「い、意味？」

見透かされたようでひやりとする。怯んだ私に、アツシユが悪い顔をして目を細めた。

「なんだよ、それとも俺と寝るのを期待してたのか？」

「……そ、そりゃあ……眠いなら……一緒に休むしかないけど……？」

「ふざけるなよ」

ざらついた声で、アツシユが吐き捨てるように呟く。

次の瞬間、私の首に細いナイフが突きつけられていた。

「……ッ……」

本能的な恐怖で心臓が跳ねる。しかしアツシユはそれ以上は何もせず、はあ、とため息をついて身を起こした。ナイフを手慣れた様子でどこかに隠す。全然わからない。

アツシユは呆れた顔でこちらを見下ろした。

「なんだよ。あの噂のキサラ・アーネストにしちゃあ、随分だな」

「噂のって何よ」

「男遊びがお好きだとか、人を翻弄する悪女だとか、色々言われてるだろ？」

「ご冗談。遊ばれていた方よ。殴る蹴るは日常茶飯事。父からも兄からも、王太子からもね」

「……」

アツシユの顔が険しくなる。

「……俺が知らない情報が多すぎる。あんたを連れてきて正解だった」

アツシユは立ち上がり、顎で風呂を示した。

「あんたが先に湯を浴びろ。余計なものを持ってきていないか検分させてもらう」

「裸はちよつと……」

王太子なら言い出すようなことなので、私は躊躇う。

「は？ ふざけんな」

しかしアツシユは眉間に皺を寄せ、私の発言を嫌悪するように吐き捨てる。

「服だ。何も隠してないか、念のためだ」

「わ、わかったわ」

そしてその後、私に先にお風呂を使わせたのち、アツシユは交代で浴室に向かった。

「あんたも来い。逃げられると思うなよ。浴室の外で俺の質問に答えろ」

「お風呂上がってからの方がいいのではないの？ 逃げるなんてできないし」

「誰か来た時、どっちかが裸の方がそれっぽいだろ」

「それっぽいつて？」

「……くつろいでるように見えるってことだよ」

アツシユは言葉を選んだようなそぶりだ、こう言った。

「なるほどね、アツシユは賢いわ」

腑に落ちる。

汗と埃を洗い流したところで、私も気持ちが落ち着いてきた。

「……ねえ、アッシュ」

話しかけようとして、振り返って息を呑む。

アッシュがちょうど服を脱いだところだったからだ。

見てはいけないものを見てしまった。背を向ける私に、アッシュはくつくつと笑った。

「……なんだよ。見たのか？」

「あの……ごめんささい……」

私はうつかり振り返ってしまったことを後悔した。

アッシュの透き通るような色の白い肌には、見るに堪えないひどい傷跡がいくつも走っていたからだ。どれも新しい傷ばかりだ。暴力を受け慣れているからわかる。これは、数年前の傷というよりもまだ一年以内の傷だ。

つまり、彼の故郷が攻撃されて以降——ヴィルカス侵攻後についた傷だ。

「ほら、ただで人の体を見て話を終わりにするんじゃないよ。あんたの話を聞かせてくれ」

アッシュが私を催促する。

私は深呼吸をして気持ちを切り替え、背を向けたまま返事した。

「わかったわ。……何から話せばいいかしら？」

「全部だ。キサラ・アーネストの知ること、あんたの正体、その全てを」

湯船に浸かったアッシュの声が反響する。

それから、私はこれまでの話をアツシユにした。

——王太子の生贄いけにえ扱あつかいだった『悪女』キサラ・アーネストの正体について。



私、キサラ・アーネストは王太子殿下の婚約者だった。

宰相として権勢を誇るアーネスト公爵がメイドに手をつけて妾腹として生ませた娘。四歳の頃に母が逝去したのをきっかけに、登録上は正妻の娘ということになっている。

当然、私の扱あつかいは家族でもっとも低く貶おとしめられていた。父は単純に、王太子のおもちゃとして与える都合の良い娘が欲しいだけだったのだから。

王太子は生まれながらの嗜虐サディスト趣味だった。

柔和な笑顔と物腰、慈善事業にも積極的に参加するその様子に、みんなは騙だまされていたけれど。彼がどんな顔をして、私を虐待していたか知ったら驚くだろう。

黒髪を手綱がわりに引つ張られ、三歳も年上の王太子に馬をさせられたり。

気に入らないことがあるれば表から見えない場所を殴られ、食事を頭に浴びせられ。突然、ご友人の子息たちの歓談に招かれたと思えば、

「この子は僕の言いなりになるんだ。見ていて」

との言葉に次いで、笑顔で服を脱ぐように命じられた。

「恥ずかしい？ 自分の恥辱の方が、未来の夫の命令より価値があるのかい？」

一枚一枚服を脱がされ、奇異の目で見られ、笑われ、服を燃やされて下着姿で帰宅を命じられたとしても、父は抗議の一つもしなかった。

私の扱いを否定する人は使用人まで含めて、誰もいなかった。

生まれ持つて加虐的な思考を持つ王太子の「ガス抜き役」として、王宮に飼われた婚約者の私は誰にとっても都合の良い存在だった。私が黙って弄もてあそばれている間に、父はますます権威を強めた。

——私はこの扱いが当たり前だと思っていた。

食事を与えられて、住まいを与えられて。それで愛されていると思ひ込んでいた、愚かにも。

社交界に出て、他の御令嬢たちの姿を見るまでは。

親に愛されて、美しく着飾った同世代の令嬢たちは、皆きらびやかで美しかった。

対して私は、殴られたあざを隠すドレスに、厚化粧。

余計なことを言えば怒られるので、社交の場では言葉がうまく出てこない。

少し仲良くなれそうな令嬢にサロンに誘われても、王太子が邪魔をして参加を断らせ続けられた。

顔を殴られてしまえばサロンには参加できない。

さらに王太子は様々な令嬢からメイドまで誘っては、その口実に私を使っていた。

「あいつは気位きぐらいが高くて一緒にいると息苦しい。君に癒いされたい」

時に私はクロゼットに閉じ込められ、私の悪口を睦言むつごに盛り上がる王太子と女性の会話を聞かされた。

王太子が私に投げつけて割った花瓶を指して笑う声も聞いた。

「見てごらん、あれはあの婚約者が壊した花瓶さ。恐ろしいだろう？」

そんな風に言われ続けて、私は令嬢たちの社交からも孤立した。

王太子の遊びと父の悪評も相まって、私の「驕り高ぶった悪女」の悪評が広まってしまった。

ここまでは、私が死に<sup>ル</sup>戻りに<sup>プ</sup>戻りの力を手に入れる以前の話。

どう足掻いても変えられない過去だ。

私が死に<sup>ル</sup>戻りを<sup>プ</sup>するようになったのは、父がヴィルカス連邦の併合政策を打ち出し、第一次併合

作戦が成功した記念パーティーの日、私が昨日壊したペンダントを父から貰った日だ。

ヴィルカス連邦——ここ、イムリシア王国の北東の山岳地帯に位置する小国だ。

父は彼らの持つ資源を奪おうと、侵略戦争を起こした。

しかし想定外のヴィルカス人の抵抗により、侵略は失敗した。

それどころか平民を中心に王国に少なくない犠牲者が生まれた。当然彼らは怒った。父は民の怒りが己や王侯貴族へと向かないよう、ヴィルカス人の悪評を撒き散らし、彼らに怒りの矛先が向くようにした。しかし民衆はもう騙されない。

ついに議会は——父を宰相の地位から解任した。もちろん私もその影響を受け、王太子から婚約破棄されることとなった。

——愚策の元宰相の娘。溺愛<sup>できあい</sup>された、高慢で醜悪な悪女。

それが私、キサラ・アーネストの世間一般の評価だった。



「ここまでが、私のこれまでの経緯よ。父が失脚し、私も婚約破棄されて用済み。いつ殺されるかわからないような状況になっていたところを、アツシユが攫<sup>さら</sup>ってくれたの」

死<sup>ル</sup>に戻<sup>ッ</sup>りについては話さなかった。

自分でも仕組みがよくわかっていないことを説明できなかったから。

「そうか」

浴室から水音が響く。アツシユが長い髪を絞る音が聞こえた。

彼は深いため息の後、独り言のように呟く。

「キサラ・アーネストが、あんたみたいな奴だったなんてな」

「意外？」

「見たときははてつきり折檻<sup>せつかん</sup>されるメイドか、愛玩用に攫<sup>さら</sup>ってきた平民かと思った。あんたの事情はわかった。だが俺の故郷が壊滅した事実は変わらない」

「あなたの言うとおりでわ」

深いため息の音が聞こえる。

「余計な拾い物しちまったな。元の場所にも帰れねえし」

「元の場所って？」

「……今は教える義理はねえ」

「そうね」

私は押し黙った。おそらく同じヴィルカス人の暗殺者同士で潜伏しているのだろう。故郷を襲ったアーネスト公爵家や、その他宿敵と言える相手を殺すために。

貴族社会は暗殺者をよく雇う。彼らの恨みを利用して政敵を襲おうとする貴族はいるだろう。

「……ありがとう。助けてくれて」

「勘違いするな。あんたはあくまで俺の目的のための道具だ」

私は自分が生きながらえた喜びばかりを考えていたけれど、彼だって状況は困ったものだった。

ふと思う。私のせいで「元場所」に帰れないということは、潜伏用に私を利用する必要も本来はなかったはずだ。——彼は、なぜ足手まといの私を助けたのだろう。

——その時、ドアがノックされる。

「俺が出る」

躊躇いなく浴槽から立ち上がり、濡れた体をタオルで包みドアへと向かう。

私が顔を覆っているうちに、アッシュはドアの向こうから透明の液体が入った瓶とパンを受け取った。お酒のようだ。

「お酒、飲むの？」

「消毒用だ」

「服は着ないの？」

下着は身につけているようだけど、流石さすがに目のやり場に困る。

アツシユは呆れた風に肩をすくめた。

「一いち張ちやう羅は洗ったからしばらくはこのままだ。着替えはあんたにやったからな」

「……失礼したわ」

アツシユは濡れた髪を拭きながら、私に顎でベッドを示した。

「そんなことより、腹を見せろ」

「ご、拷問？」

「……怪我してただろ。黙って腹を見せろ」

「……え、ええ」

強めの語気で言われ、私は恐る恐るシャツを捲めくる。

アツシユは私の前にしゃがむと、お酒を染み込ませた布で傷口を消毒してくれた。

「っ……」

沁みて痛いのを堪こらえているうちに、アツシユはいつの間に取り出したのか、道具箱から軟膏のよ  
うなものを取り出し、私の傷口に塗ってくれた。

手当て中、ずっと眉間に深く皺皺が刻まれている。

「打撲はどうしようもねえな。骨は……折れてない。他、痛むところはあるか？」

「随分とお優しいのね？」

アツシユは苛いら立たしげに眉根を寄せる。

「あんたをずっと抱えて走るわけには行かない。足手まといは困るんだよ」

「なるほどね。そうね……首の後ろと、肘ひじのところ……かしら」

全身どこでも痛いけれど、強しいていうならここだった。アツシユはそのまま、黙って手当てをしてくれた。私はされるがままだ。そしてそのアツシユ本人の体があちこち傷だらけで、私は反応に困った。黙っていると、部屋には手当てをする音だけが響く。

「ねえ、……ええと。アツシユは……ずっと暗殺者をしているの？」

不機嫌なアクアマリンの眼差しがざらりと私を睨む。綺麗なのに怖い。

手当てを続けながら、アツシユは「誰のせいだと思ってやがる」と低く呟く。

「故郷から奪われた『女神の右目』を取り戻すためだ。……アーネスト公爵家に持ち運ばれたことまでは突き止めている。誰がこんな家業、好き好んでやるか」

「……そう……」

「安っぽい同情をするくらいなら、さっさと『女神の右目』の在処あつかを吐いてほしいぜ」

「知っていたらすぐにべらべら喋しゃべりたいくらいだよ。私も父は嫌いだから」

アツシユは皮肉めいた笑みを浮かべ、私の顔を見上げた。

「あんたも知る通り、エノック・アーネストが指揮した侵略で、俺の故郷は壊滅した。あんたらが『獣の民』と侮蔑あべつする、ヴェイルカス連邦——そのクレスタ州の集落だ。俺は集落を取り戻すためならなんでもやる」

「クレスタ、州……」

知らない地名だった。ヴィルカス連邦は山岳地帯の麓ふもとに村を形成しているだけの小さな集落の集まり——というのが、私の知る知識の全てだったから。

『女神の右目』は、アーネスト公爵家にはなかったのよね?」

「ああ。近くにあったらすぐにわかるんだ。魔石は共鳴し合い、俺はそれを探知できる。……同じ産地のこれがあるから。色は違って金色。猫目の輝きをした、人間の眼球くらいの大きさの石だ」  
アッシュは己の右耳を示す。小さなピアスが挿してあった。瞳の色と同じ、アクアマリンに似た石が嵌め込まれている。

「……金色の、石……」

寶石はたくさん見てきたけれど、どれも似ていてよくわからない。

「父は大切なものほど自分の手元に置いていたわ。宝石庫になかったのなら、別のところに置いているのかもしれない」

「……もう一度潜入するしかないか……」

「アッシュ。私にできることならなんでもするわ。父への復讐だって、『女神の右目』探しだって。代わりにあなたは私が安全に暮らせるまで私を守る。どうかしら?」

次の瞬間。私の鼻先にはナイフの切っ先があった。

「ッ……」

冷たい氷色の瞳には、憎しみと怒りが宿っている。

「あなたは交換条件を出せる立場じゃないんだよ。わかってんのか、俺の仇かたきの娘だってことを」

私は息を呑み、そして深呼吸する。

こういう時は恐怖に呑まれては冷静な判断ができなくなる。

ゆっくりと呼吸をして、相手の目を見つめる——何度も死んだ中で覚えたことだ。

「……わかっているわ。だから私が役に立たないと思えば捨てていい。役に立つと思うのならば……私が生き延びられるように守って」

「職業幹旋所にでも行つてこい。住み込みメイドでもやりゃあ生きれんだろ」

「無理よ」

知っている。前の死に<sup>ル</sup>戻りで試したことはある。

「私の顔を知る貴族に会つてしまえばおしまい。そもそも世間知らずなんですから、このまま外に出ては、私がキサラ・アーネストだと言つて回るようなものよ。そうしたらどうなるのか……おわかりでしょう？」

「殺されるだろうな」

「正解。でも、ここで私を放り出したらあなたは終わる。警備が嚴重になるであろうアーネスト公爵邸に再び忍び込めるほど、時間の余裕はあるかしら？」

「……」

「ね？ お互い協力関係として、うまくやっていきましょようよ」

私は微笑むと、アッシユはそのままじつと考え込むように、私の顔を見た。

「……怖いから、ナイフは下ろしてくれないかしら？」

こういう時は素直に頼むに限る。私の言葉に、アツシユが言ったのは意外な言葉だった。

「髪」

「え？」

「揃えてやる。そのままじゃ目立ちすぎる」

アツシユはそう言うと、顎で私を浴室へ移動するように命じる。浴槽に腰掛けた私の髪を、アツシユは真面目な顔をして整えていった。

「ナイフだと怖いんだけど」

「はさみ銚はない。贅沢言うな」

しゃりしゃりと、首のそばで刃物が動く感覚にひやひやしなながら、私は黙って終わるのを待つ。終わった後鏡に映っていたのは、随分とスッキリして、正直自分でも——前よりずっと軽やかに見えるようになったショートボブの自分自身だった。

刃物を持った暗殺者と二人きりなんてことを忘れて、私は思わず嬉しくなる。

「お上手ね」

私は彼を見た。彼は銀髪を長く伸ばしているものだから、こんな芸当は己には必要ないはずだ。

アツシユは一瞬、感情が込み上げてきたような顔をする。そしてひどく疲れたような、虚しさを滲ませた皮肉な笑顔で答えた。

「……きょうだい弟妹の髪、よく切ってやってたからな」

——彼の故郷は父によって被害を受けたのだ。

そのごきようだいがどうなったのか。アツシユは話さなかつた。私も当然、——それ以上尋ねるなんてできなかつた。



それから数日かけて、私はアツシユと一緒に南の港町クーリエまで移動した。アツシユは私を時々宿や、時には教会に残しては、あちこちで情報を集めている様子だった。

私はこの数日間だけでもいろんなことを知った。

宿に泊まる値段。ご飯を食べる値段。清潔な身なりを整えるための値段。私の黒髪の価値。アツシユに渡した黒髪は「当分の生活には困らない」ほどの金額で売れて、逃亡資金として役に立っているらしい。

「平和ね……」

昼下がり。

私はアツシユに留守番を言いつかつた宿の窓辺で、宿に置かれた自由に読める雑誌に目を通しながら呟いた。窓の外からは陽気な音楽や賑やかな子どもの声が聞こえる。

「こんな世界が外にはあったのね……」

人生の中で、こんなに穏やかな時間を過ごしたのは初めてだった。

協力者がいるというのはどれだけ心安かになれるのか、実感した。

しかし同時に知らないことばかりで、あの死ルに戻りリで学んだことはなんだったのかとも思う。私は無知だ。私の視野はずっと狭いまま、永遠を繰り返していたのだ。

夜になり、宿に戻ってきたアッシュは、ベッドの上に路銀を広げて見せた。

「あと一週間、ってところか」

「逃亡生活ってお金がかかるのね。ここまで大変だと思ってなかったわ」

「髪を貰った意味、わかったろ」

「ええ。……もう少しならあるわよ？ 全部刈ってしまったえば」

「ばか。短すぎて売れるか」

「アッシュが髪を伸ばしているのも、売るためなの？」

この国の男性がこんなに髪を伸ばすことは滅多めったにない。

私の質問に、彼は皮肉を浮かべた笑みで答えた。

「俺に切って売れっか？」

「目立つのにわざわざ伸ばしてるから。理由があるなら売るためなのかと思ったのよ」

アッシュはしばらく考えていたが、その後教えること決めたのか、話し始めた。

「……俺たちの髪は墓標と同じだ。骸むくろが朽ちた後、彼を知る者がいなくなっても、遺髪だけはそこに残せる。亡き同胞を偲しのぶために俺たちは髪を伸ばす」

「それは……売れないわね」

滅多なことはないもんじゃないと、私は反省する。

彼はまた、昏い瞳で私を見て笑う。

「集落は燃えた。意味は、あんたもわかるよな？」

「っ……」

「俺からこの髪まで奪うか、キサラ・アーネスト？」

「……それは……」

「話は終わりだ」

私が黙り込むと、アッシユはそのまま路銀を片付け、ベッドに身を投げ出す。

なんとも言えなくなつたまま、私も当たり前のように隣に寝転んだ。背を向けたアッシユの長い三つ編みが、私の目の前に垂れている。体は傷だらけなのに、髪だけは意外なほどつやややかで綺麗だ。暗殺者としての生活で荒れてもおかしくないだろうに。意味を知るとまた違って見えてくる。

隣に寝そべっても、アッシユは特に文句をいうこともなかった。潜伏生活の中で、体力のない私が床に寝ることを、アッシユは禁じていた。余計に足手纏いになると。

そんなこともあり二人で過ごす間、私たちは一人用の狭いベッドに二人で眠っていた。暗殺者と仇の娘が二人で横になつてゐるなんて、おかしいと思う。けれどアッシユは寝込みに殺そうとはしなかつたし、私も隣に体温がある方が、不思議と安心して眠ることができた。少なくともアッシユが隣にゐる間は、私は一人じゃない。

沈黙の重さに黙っていると、次第に眠くなつてきた。



翌日も朝からアッシュがどこかへと向かった。

宿を移動することになり、居場所を失った私は公園で鳩を見ながら暇を潰していた。髪も短い、アッシュに借りたぶかぶかの服を折って着ているので男の子に見えるのだろう。女一人でも、誰かに見咎められることもなかった。

私にとつては、ただベンチに座って景色を眺めるだけでも新鮮だった。

朝から人は働いているし、お酒を飲んでいるおじさんもいる。私より若く見える女の子が「お母さん」なんて呼ばれながら子どもを連れてくることにも驚いた。死に戻りの中にある時も、私はずっとキサラ・アーネスト公爵令嬢だった。一歩踏み出すだけで、知らないことばかりだ。

アッシュが戻ってきた。

「早かったわね」

彼は硬い表情で足早に近づくと、ベンチの隣に座る。そして声を潜めて告げた。

「俺は探されている」

私は反射的に顔を見た。

「私が生きているってバレたの？」

「そっちに関してはわからない。まずアーネスト公爵家は娘についてまだ公に発表していない」

「確かに私、ほとんど引きこもっていたから気にする人もいないでしょうね」

「俺に関しては、戻っていないからな。アーネスト公爵家に殺されたか、寝返ったか、暗殺に失敗して女とどこかに逃げたか……あつちは当然気になるだろう」

「こんな時、やっぱり……お仲間に連絡を入れるわけにはいかないのよね？」

アッシュは眉間に皺を寄せた。

「同胞に連絡はできない。俺を裏切り者ということにして切り捨てて貰ったほうがまだ。だからこっちでなんとかするしかねえんだよ。あんたも何か役に立て」

「もちろんよ」

強く頷きながらも、ここからどうすればいいのかもわからない。死ルに戻ルりで得た知識で役に立てると思っていたけれど、外の世界に出ると想像以上に、私は無力だった。

アッシュがガサガサと音を立て、新聞の包みを私に渡した。

「ほら、朝飯。少ないからよく噛んで食えよ」

「ありがとう」

アッシュは険しい顔でずっとパンを咀嚼そじくし続けている。

「腹減った……」

心の底からの渴望を呟くと、アッシュはそのままじっと公園の植え込みの辺りを睨んでいる——  
野うさぎがいる。

「この辺のうさぎ、よく太ってるな……」

「うっ!? うさぎ食べるの!？」

「流石にそこは食わねえよ。目立つし」

空腹でトゲトゲする気力も削そがれているのか、アッシュは答えてくれる。

「そ、そう……」

「畑のほう、いのしし猪とかいねえかな……」

「なんで猪?」

「畑荒らしてるの退治したら分けて貰える」

「……猪って食べられるの?」

「食べるさ。こっちの国でも食ってるよ」

「ほ、ほんと?」

「気になるなら今度どっかの村に寄った時間聞いてみるよ。畑を荒らすやつを捕まえて食ってるから」

「……し、知らなかったわ……」

話しすぎたと思ったのかアッシュは話題を打ち切ると、さっさとパンの耳を齧る。私も包みを開く。パンの耳が山ほど入っていた。一つ手にとって食べると、さくさくとしておいしい。

「アッシュはすごいね。……猪も狩れるし暗殺者にもなれるし。一人なら生活に困らなさそう」

「一人で食う分だけなら、な」

「……足手纏いの意味を実感し続けているわ」

「そりゃ何より」

醒めた口ぶりでアツシユは言った。彼の手の遅しさを慣れた様子に、私はしみじみとする。彼は他にどんなことができるのだろう。私は興味を湧いてきた。

けれど、当然、無邪気にあれこれと聞ける立場ではない。

まずは、この状況をなんとかしなければ。これでは真正銘ただの足手纏いだ。

——アツシユは生きる術を知っている。猪の狩り方を知っている。

じゃあ、私は何を知っている？ 何ができる？ 考えながら、私はパンの耳を食べながら目を落とす。包み紙にされているのはゴシップ新聞だ。私はハッと閃いた。

「そうだわ……アツシユ。思いついたわ。私が持っている宝は、髪やドレスだけじゃなかったわ」「は？」

突然興奮した私に、アツシユは困惑気味に眉を寄せる。

私は急いで新聞紙を広げて、出版社の名前を指さした。出版社はフルニエール広報社。この街に本拠を置き地方新聞を取り扱う会社だ。

「私をこの出版社に連れて行って。策があるの。最悪失敗したら捨てていいから」「いきなりどういふことだ」

身を乗り出したアツシユに私は考えを披露した。半信半疑な様子でアツシユは片眉を上げた。「……うまくいくのか？」

「うまくいかせるのよ」

私はにっこりと笑って見せる。私にもうまくいくかはわからない。鳥籠きやうかごの外に出て、こんなことをするなんて初めてだから。

アッシュは洪い顔をしていた。私は言い募る。

「足手纏いかどうか、確かめるいい機会じゃなくて？」

最後の言葉にはウインクを添えてみた。なんだか悪女っぽいとわくわくとする。

アッシュはしばらくじっと私を見つめていたが、決心が固まったように、ふっと肩の力を抜いた。「俺は目的が達成されればそれでいい。あんたの策に乗る」



翌日。私たちは早速フルニエル広報社の前に立っていた。朝市広場を四角に囲った建物の立ち並ぶ市街地、その日陰側の角にフルニエル広報社は位置している。

一階にはカフェが入っていて、気難しい顔をした紳士がテラスで新聞を読んでいる。上を見上げると、カーテンで閉め切られた部屋や、書類で窓が覆われているような部屋も見える。窓も曇っていてあまり掃除は行き届いてなさそうだ。

「棒立ちになってどうした。怖気おび付いたか」

隣のアッシュが煽る。

「……いいえ、気持ちを落ち着けていたの」

私は深呼吸して頬を叩く。そして悪女らしく顎をつんと高くしてアッシユを促した。

「行きましようアッシユ。勝負はここからよ」

背筋を伸ばし、堂々と玄関ドアを開く。何かを読んで暇をつぶしていたらしい受付の女性が、私たちを見遣って面倒そうに上から下まで眺めて再び目を落とす。ブラウスにシンプルなロングスカートを履いた、街に降りて以来あちこちで目にした職業婦人と同じ装いをしている。

「使用人幹旋所は隣よ。間違えてるわよお嬢さん」

「いいえ、間違えていません」

私はきっぱり否定し、彼女に向かって背筋を伸ばして胸を張る。

「私、キサラ・アーネストと申します。責任者のフルニエル男爵とのお約束をちようだいしたくて参りました。手紙を置いてもよろしくて？」

女は目を瞬かせ、上から下まで眺め回すと、興味を失ったように視線を再び手元へと落とす。

「……はいはい。あなたのような人たくさん来るのよ。キサラ・アーネストだとか、王太子の側近とか、ゴシップを知ってるメイドとか、色々だね」

「話を聞いていただければ、嘘ではないとわかるわ」

「嘘だろうがなんだろうが興味ないの。とにかく、あなたのような人が記者の手を煩わせないように私が雇われているんだから、通すわけにはいかないの」

あっちに行って、と言わんばかりに片手で払われてなすすべもない。

私は振り返ってアッシユを見る。アッシユは黙って肩をすくめる。

そこにくたびれた姿の中年男性が通ったので、私は急いで彼に近づいた。

「失礼。私キサラ・アーネストと申します。御社おんしゃにとって良い情報を差し上げますので、」

「はいはい、急いでるから」

「私、貴族階級のゴシップなら、いくらでも出せますわ」

「冗談言うなよ、じゃあな」

すたすた。疲れた様子で、男性は立ち去っていく。受付の女性が嫌そうな顔をして私たちを見た。

「いい加減出て行ってくれない？ そろそろ私が怒られるんだけど」

「……ではせめて、お手紙を置いていってもよろしくて？」

「そこに置いて」

私は用意していた手紙に、女性の目の前でサインをする。目の前でサインをすることで私が書いたと証明してもらおうのだ。

広報社を出て、私たちは顔を見合わせた。

「……軽くあしらわれちゃったな」

アツシユは肩をすくめた。

「まだまだよ。策はあるわ」

私はふてぶてしく笑って見せるけれど、嘘だ。

ここまでつれないとは思わなかった。キサラ・アーネストの名を出せば多少なりと特別扱いしてもらえろと思込んでいたのだ。